

年末ならやま研修会

北川忠生・近大農学部准教授による  
「畑を耕す魚類学者」

吉川 利文

2021年の掉尾を飾る「年末ならやま研修会」が、12月18日午後、奈良市法蓮町のホテルリガーレ春日野で行われた。講師は近畿大学農学部環境管理学科の北川忠生准教授。ビオトープでおなじみの、あのペタキン先生。題して「畑を耕す魚類学者」。コロナ禍のため対面の講演会は久しぶりだったが、この日は准教授自らパソコンを操作しながらの熱弁だった。

北川先生だから、話の中身はもちろんペタキンが主人公。まずは先生とペタキンとの出会い。近大に赴任されて2年目の2005年、絶滅危惧種の奈良県版レッドデータブック作りの魚類委員として奈良公園の池を調査中、ニッポンバラタナゴを数匹発見したのが始まり。当時、この魚は九州北部、香川県、大阪・八尾の三か所にしか生息していないことになっていた。

ここからのお話は「絶滅危惧種」がキーワード。奈良での地方名ペタキンがなぜ、奈良公園で生息していたのか、今後どう守っていくのか、と話は展開していく。

奈良公園の池は、落ち葉や鹿の糞が分解されないまま溜まり、環境が悪化していたが、公園の景観維持のため、時折しゅんせつされ、かろうじて水質が維持されたため、タイムカプセル状態でペタキンが生息していたらしい。

北川先生はこれらのペタキンを持ち帰り、大学に作った「希少魚ビオトープ」で飼育することになるが、奈良公園でペタキンが生き残った意味を考えた。ため池が温存され、時折しゅんせつされることは、ため池が人間とのかかわりを持っていること、絶滅を促進する要因は自然と人間社会のバランスの崩壊であるが、それを食い止め、かつてのバランスを現代に蘇らせることが大切であることを痛感した、という。一方、ペタキンはどぶ貝の中に卵を産み、その

中で成育する。どぶ貝はハゼの仲間のヨシノボリのヒレに卵を産みつけ大きくなることがわかっていった。つまり、ヨシノボリ→どぶ貝→ペタキンという循環がないとどれも存在できないことになる。この循環を生態系というが、ペタキンを守るということは生態系を守るということである、と北川先生は強調。

ここからが「北川プロジェクト」の本領である。生態系を守ることに加え、「かつての人間社会と自然のバランスを現代に蘇らせるため」として、北川准教授は「里山の復元」をあげる。大学の希少魚ビオトープの近くに田んぼや畑を作り、池のヘドロを汲み上げてそれらの肥料にする。また、水を循環させると、ペタキンが増える、ホタルが飛ぶ、カエルが何種類も現れる、と自然がよみがえった、という。

生態系を守るためには、関係する人も作らなければならない。いろんな人に知ってもらうため、小学校で環境教育の中で取り上げてもらう、地域と提携する、寺や団体・企業にも取り組んでもらう。最近では、生産者やレストランとも連携、ペタキンを含む生態系の中でできた農産



品を「ペタキンの恵み」というブランドで食材に使ってもらっている、という。



講演会のあとの懇親会には、北川プロジェクトの近大生6人も招待された。異例で画期的な



世代間交流となり、当会の会員たちは自分の息子、娘と話し込むように交流し合った。席上、来年年

男になる北川先生に鈴木顧問から手作りの干支の虎の置物が、またならやまの新名所・新名物の命名者にやはり同顧問手作りのクラフト記念品が、それぞれ贈られるなど“忘年懇親会”の様相で盛り上がった。